

審査講評 第16回 日本水大賞委員会 審査部会長 虫明功臣

日本水大賞は、今回第16回を迎えました。審査部会長として、「日本水大賞」への応募状況ならびに審査・選考の経過についてご報告申し上げます。審査部会は、日本水大賞委員会のもとに各賞の候補を選考するために設けられており、水防災・水資源・水環境・水文化等の分野の専門家や学識経験者17名で構成されています。審査は、「日本水大賞」募集要項に記された「対象の範囲」および「審査基準」を基に進められました。各賞の候補となった活動は、日本水大賞委員会に報告され、審議の結果、“大賞（グランプリ）”をはじめとする日本水大賞の各賞が決定されました。

応募状況

本年は秋田県、島根県、徳島県を除く全国の都道府県から、昨年に比べて14件少ない総数171件の応募をいただきました。応募活動を主体別に見ますと、団体が55%、個人が16%、学校が21%、企業が6%、行政が2%となっています。活動分野別では、水環境47%、水文化20%、水資源16%、水防災10%、一昨年から新設した復興支援分野が7%となっています。主体別ならびに活動分野別の応募割合は、いずれも昨年とほぼ同じ数字となっています。

今回は特に、海外での優れた活動の応募が目立ち、「国際貢献特別賞」を設けて、そうした応募に対応しました。

審査結果：各賞の受賞者と活動名称および審査講評を以下に示します。

○大 賞<グランプリ>：岐阜県 岐阜市水防協会

「水と闘い半世紀 新たな時代の水防団～次世代を担う若年層へ水防の継承～」

古来幾多の深刻な大水害を受けた岐阜市では、団員合計1600名を超える29水防団を維持して水害から地域住民の生命と財産を守るための活動を継続しています。近年、大規模な水害を被っていない中で、水害の記憶が風化し、地域の「自助」、「共助」による自衛意識が希薄になって行くことへの対策として、小中学生を対象に過去の大水害の記録を語り継ぐとともに、水防演習において中高生に水防工法の伝統技術を体験的に伝承する活動を始めています。これらの活動は、次世代を担う子供たちの防災・減災教育だけでなく、地域社会が水防活動の重要性を再認識する波及効果も持っています。

全国的に水害に対する地域の自衛意識が薄れ、水防団が弱体化して水防は行政が行うものといった風潮が支配的になっています。しかし、災害から被害を最小にするためには地域の防災力が不可欠なことが、東日本大震災で再認識されました。水防活動の意義と具体的方法を次世代に伝えて地域防災力の向上と継続性を維持しようとするこの新たな取り組みは、全国の模範として極めて高く評価されます。

○国土交通大臣賞：鳥取県 袋川をはぐくむ会

「鳥取市の中心市街地を流れる袋川の環境保全活動」

鳥取城の外堀であり、明治期までは市民の生活用水に使われていた袋川は、新袋川の開削による水量減、高度経済成長期の廃水の流れ込みとゴミ捨て場と化した河川敷によって悪臭を放つドブ川になってしまいました。これを嘆いた沿川住民が17年前に「袋川をはぐくむ会」を結成、住民グループが清掃活動、美化活動、水質浄化活動を進める一方、鳥取県、鳥取市、国交省鳥取河川国道事務所を巻き込んで、ヘドロの浚渫、流路の蛇行、新袋川からの分流量の増強、土堤の遊歩道化を実現。工場排水規制や公共下水道の進捗と相俟って、平成24年には水質BOD1.5mg/lとなり、昔のように魚や昆虫や亀が生息し、鳥が飛来する清流の再生に漕ぎ着けました。こうした中で、子供たちによるカヌー遊び、桜土手を歩こう会、写真コンテストなど多彩なイベントを行うとともに、袋川への河川名称の復活運動を行うなど、地域に親しまれる川づくりに努めています。住民と行政の連携・協働によるふるさとの川と川辺の再生への長年にわたる尽力を称賛し、その成果を高く評価します。

○環境大臣賞：福島県 清らかな湖、美しい猪苗代湖の水環境研究協議会

「猪苗代湖の水質保全のための水生植物等回収活動」

平成14～17年の間、環境省の全国湖沼ランキング1位であった猪苗代湖は、近年、大腸菌群数が基準を超えたため、ランキングの対象外となっています。平成20年に大学研究者、民間団体、県と流域自治体で構成される上記の研究協議会が、水質悪化の原因究明とともに水質改善への実践活動を進めるために設立されました。その調査研究によって、phの上昇、CODの上昇、大腸菌類の環境基準超過、湖面の泡筋など水質汚濁が顕在化している要因の一つは、北部水域での水生植物群の枯死による有機物の増加にあることを突き止め、漂着水草等の回収とその有機資源化を掲げて、「水質日本一復活」へ向けて県民運動を展開しています。具体的には、県内の各ロータリークラブ等で組織されるボランティア活動によって、平成21年から5年間に延べ6059人の参加を得て総回収水草量約567m³の成果を挙げています。猪苗代湖の水質日本一復活への向けての啓発ともなっている、科学的な原因究明と原因除去のための実践活動を一体化させたこの取り組みを称賛し、高く評価します。

○厚生労働大臣賞：熊本県 公益財団法人 肥後の水とみどりの愛護基金

「水はみんなの命－熊本の水資源愛護啓発プログラム－の映像制作と啓発啓蒙活動」

人口約100万人の熊本地域の水道水源は全てを地下水で賄われていて、量的にも質的にも恵まれたおいしい水を誇っています。しかし一方で、水源涵養域である森林や水田の減少と地下水使用量の増加などによって、その枯渇と汚染が憂慮されています。この財団は、30年近くにわたって「肥後の水とみどりの愛護賞」の顕彰、水源涵養林の保全育成、耕作放棄水田の湛水による地下水涵養の増強など、水の大切さを啓発するとともに幾つもの地下水保全活動を行ってきましたが、今回は熊本の地下水のメカニズムを3Dグラフィックスやアニメーションを駆使して分かり易く「見える化」した啓発映像DVDを新たに制作。熊本県内小中学校で文部省選定の学校教育教材に指定されて活用されるほか、県内企業約300社への配布、市民への講座の開催などを通じて県内各地で上映され、これまでの視聴者累計は約4,300名にのぼると言われています。DVD映像制作を含むこれまでの熊本地域地下水の保全と愛護啓発に関する取り組みに称賛と敬意を表し、高く評価します。

○農林水産大臣賞：長野県 長野県臼田高等学校 グリーンライフ科 農業クラブ

「県絶滅危惧種オオアカウキクサの農業利用地域連携」

この農業クラブは、約10年前から長野県の絶滅危惧種IB類のオオアカウキクサ（学名：アゾラ）の水田稲作における雑草の抑制や緑肥効果に着目した調査や実験研究を進め、その活用に関する成果を挙げてきました。具体的には、アゾラを人工的に効率よく量産する方法の開発に成功する一方、継続的な水田実験において、深水栽培とアゾラを組み合わせることより、雑草抑制効果と緑肥効果が現れてアゾラ水田区で増産が得られることを明らかにしています。また、アゾラを繁茂させた休耕田試験区とアゾラを入れない対照区でのマコモダケ栽培実験の比較によって、アゾラ休耕田の方が生育と収量のいずれにおいても優れていることを示し、休耕田の地力保持と活用に有用な示唆を与えています。さらに、乾燥したアゾラを混入させた培養土は堆肥よりも有機質が多く含まれており、実用化／商品化を目指して野菜や花卉類で栽培実験が進められています。絶滅危惧種の保全のみならず、その活用法の開発によって、中山間地農業の振興を目指すこの取り組みを高く評価し、称賛します。

○文部科学大臣賞：福岡県 東筑紫学園高等学校 理科部 広谷湿原保全プロジェクト

「北九州 平尾台カルストにある広谷湿原の再生活動」

カルスト台地では、縦穴、横穴を通して地下を水が流れるので、地表に湿地はできにくいのが一般的ですが、北九州市・平尾台の“広谷湿原”は、日本で唯一カルスト台地にある珍しい湿地です。当校理科部は21年前から、この湿原に注目してその成因と面積減少の原因を明らかにするために、測量や流量観測など地道な調査・研究を重ねてきました。1994年、2001年、2010年の測量結果から、この17年間に60%以上湿原面積が減少したこと、その原因が2000年に施工された保全工事（人工道と木道の建設、人口河川の掘削）にあることを指摘して、4つの保全対策を提言。その内の一つである草原性植物のネザサが生えている表土をはぎ取る「かきおこし」を自ら実践して、湿性植物が復活

するなどの成果を上げているとともに、4つの提言は、県当局などにも受け入れられ、理科部は湿原再生対策を審議する委員会の委員に選ばれています。地道な基礎的調査・研究の上に保全対策を提言し、これを行政とともに実践しているこの高校生の自発的取り組みを称賛し、高く評価します。

○経済産業大臣賞:愛知県 小島プレス工業株式会社

「工場内の水エネルギーを活用した小水力発電装置の開発と実装」

この企業は、工場内には冷却用水など未利用の水エネルギーが豊富にあることに着目して、これを効率的に活用する小水力発電装置を開発し、実用化しています。具体的には、名古屋大学との共同研究として、3D プリンターを用いて、従来の形状とは異なり超低落差でも発電が可能な「傘型6枚羽らせん水車」を考案、これを組み込んだ小水力発電装置が構築されました。その発電効率は、従来の水車の約2倍の高性能を示し、低価格でスペースを取らないという特長を持っています。このらせん水車の製造は、従来の製造技術では困難であり、3Dプリンターの活用によって可能になったと言われています。社内に実装した小水力発電装置からの電気は、非常時の災害対策用蓄電池にも充電されています。この装置は、現在、西三河工業用水協会、豊田商工会議所などの地元企業団体の支援を受けて普及が図られていますが、今後、全国展開も期待できます。再生可能エネルギーの活用が社会的な関心を集めている中、身近な工場内の未利用水エネルギーに着目して、低価格・省スペースの小水力発電装置を開発／実装したことを高く評価します。

○市民活動賞:埼玉県 NPO法人 水のフォルム

「市民による流域の健やかな水ネットワーク保全活動」

「流域は地球のパーツ。流域の水循環が健やかであれば地球環境はよくなるはず。流域の水のつながりを重視し、市民が担えること、協力できることをやる。」をモットーに多彩な活動を展開しています。具体的には、流域の水を横断的・総合的に学ぶ機関誌「水のFORUM」を発行。その特集では、当初は荒川流域、その後利根川流域にも視野を広げて、各地域の地勢的特徴との関係を踏まえながら東京湾から秩父に至る水問題と河川・流路の歴史・文化を纏め上げています。また、流域水ネットワークの中で「浄化施設」としての機能を持つ水田稲作は都市にとっても不可欠の役割を果たしているとの認識のもとに、“見沼田んぼ”の農家と一般市民等とが連携して耕作する「市民田んぼ」を開設。農家と非農家とが協働で取り組む水田の維持・保全の拡大に向けて活動を続けています。さらに、ここ数年、専門家を講師とする、年10講座よりなる「さいたま・水と緑のアカデミー」を開設。

講義録は新書版にして広く配布されています。このユニークでレベルの高い市民啓発活動と環境保全活動の実践を称賛し、高く評価します。

○国際貢献特別賞:静岡県 村瀬 誠

「バングラデシュの飲み水の危機を救う天水活用の推進」

地下水のヒ素汚染、池の病原微生物汚染そして塩害により、バングラデシュの飲み水の危機は深刻です。農村では昔から天水を素焼きの甕に貯めてきた歴史がありましたが、容量が少なくかつ壊れやすいものでした。村瀬氏は、タイ東北部農村地帯で使われていたモルタル製の甕に着目して、バングラデシュの左官工をタイに派遣して技術移入し、貧困層でも入手できる安価で丈夫な1000リットル用の甕 (AMAMIZU) を開発して、2011年には生産工場を立ち上げ、ドネーションだけでは事業の継続が期待できないので、ソーシャルビジネスの手法を取り入れ事業の継続性を確保する一方、オーナーシップの育成を図っています。具体的には、貧困層でも購入できる価格に設定する一方、天水活用事業の拡大と「のれん分け」を意図してAMAMIZU左官工・AMAMIZUマイスターの育成に尽力しています。AMAMIZUは、2012年には200基、2013年には600基が設置されています。バングラデシュのヒ素汚染地帯に安価で安全な飲料水を提供し、その事業を地域産業として根付かせるソーシャルビジネスとして運用する、この草の根の国際貢献活動に、称賛と敬意を表します。

○国際貢献賞：岐阜県 特定非営利活動法人 ソムニード

「住民主体による小規模流域管理と森林再生を通じた共有資源の管理とコミュニティ開発」

少数民族の人々が農業で自給自足するインド・アンドラデシュ州の山岳地帯では、人口増加や気候変動によって、水不足-農作物の不作-若年層の流出/無計画な農地開発-自然環境の荒廃-水源の衰退・・・という悪循環に陥っていました。このグループは、「地域住民が自ら流域の水循環を理解し、水資源の現状を分析した上で、水資源再生・保全のための方策を身につけて実施する」ことを理念として、彼らが考案した「対話型ファシリテーション」なるコミュニケーション法を使って、7年間すべての過程で地域住民が自ら決めて実行するよう、粘り強く誘導しました。その結果、土壌流出抑止のための石垣や堰堤の設置、場所に合った植林、ため池の設置など、村ごとの状況にあった対策が考案・実施され、それらを維持・管理するための組織として流域管理委員会が設置されるまでになりました。恒常的水不足は解消されて出稼ぎの必要性は薄れ、農業収入が増えて若者を中心に村は活性化していると言われます。地元に取り添って地域住民の自立を促すこの国際貢献の取り組みを高く評価します。

○未来開拓賞：宮城県 宮城県工業高等学校

「みやぎの水の力を借りてII～宮城の復興を目指した新エネルギー開発～」

広瀬川に隣接して立地している当校では、約50年前から水質調査などを行ってきましたが、東日本大震災で経験した深刻なエネルギー不足をきっかけに、宮城県で生産できる安全な再生可能エネルギーとして「オイル産生藻類」の研究を開始。いくつかの大学等から情報と指導を得ながら研究を進め、広瀬川の水に対しては高価な薬品を使わずに大量培養に成功、仙台湾の海水では滅菌なしでの培養に成功。また、広瀬川の水から取り出した新規のオイル産生藻類の大量培養にも成功し、抽出したオイルの燃焼試験を行うなど着実に成果を上げてきています。未だコスト面で課題がありますが、休耕地の利用や燃料生成過程の改善等によってコスト減を図る計画を持っています。成果は、地球温暖化ガスの削減と新エネルギー開発の啓発・普及を意識して、文科省事業「サイエンス・パーク・パートナーシップ・プロジェクト」報告会等の様々な機会を捉え、県内の大学・高校・研究機関、関係省庁や企業、一般市民にも広く広報することを心がけています。復興のために地元資源の活用に着目した高校生のこの先進的な取り組みを高く評価し、実用化に向けた更なる研究の進展を期待します。

○未来開拓賞：岐阜県 岐阜県立大垣養老高等学校 食品化学班

「環境資源の新たな利用による水辺保全の啓発活動～養老孝子伝説再現プロジェクト～」

この高校生グループは、「滝の水が酒になり、それを飲んだ老人が若返った」という孝子伝説で有名な「養老の滝」とその近くの湧水「菊水泉」周辺の清掃活動と水質調査を行っているうちに、年間60万人の観光客が訪れるこの一帯が、付近の人々の保全活動によって非常に綺麗な水質に守られていることを認識。このことを広く知ってもらい、この地域観光資源を別の観点からよりアピールできないかと考えました。そこで、水に浮かんだ桜の花弁から酵母を分離した京都大学の論文を参考にして、桜の時期に滝近くにある「菊水泉」で採水した水からアルコール生成酵母の分離に成功。これを「菊水酵母」と命名し、地元で収穫されたミカン果汁に接種することにより4%の果実酒を試作して、養老孝子伝説の再現に成功しました。今後、パンなどの発酵食品づくりに応用して、養老伝説・特産品の製造・販売に結び付けようとしています。身近にある地域の環境資源に新たな価値を創造することによって、環境保全の大切さを啓発しようというユニークな発想とその一部実現を高く評価し、更なる発展を期待します。

○未来開拓賞：京都府 京都市立伏見工業高等学校

「マイクロ水力発電を活かした地域づくりを目指す活動～水車プロジェクト～」

当校では、地域との連携や環境・エネルギーに関する学習の一環として、高齢化、過疎化、耕作放棄地の拡大、森林の荒廃など様々な問題を抱えている京都市、兵庫県福知山市や奈良県吉野村等の中山間地において、地域の活性化と健全な里山環境の再生・維持を目指して、灌漑用水路を利用したマイクロ水力発電の普及を進めています。導入の目的は、獣害から農地を守る電気柵やハウスの電源確保、常夜灯の電源、災害や停電時の非常用独立電源、地域振興（水車の里づくり、など）のための電源など、地域によって異なります。各地域の行政やNPO法人等と連携し

ながら地域の水路環境に合った技術指導を行い、これまでに10基以上の水車が稼働しています。発電機についても、例えば、間伐材など入手しやすい材料で安価に製作できる水車や浅い水深でも発電することができる可搬式の水車など、様々なタイプの水車を考案・製作しています。地域の環境に合ったマイクロ水力発電システムを地域と連携しながら導入してゆくこの高校生の地域貢献活動を高く評価し、今後の更なる発展を期待します。

○審査部会特別賞:山梨県 特定非営利活動法人 甲斐駒清流懇話会

「溪流環境の保全と地域の防災に関する活動」

昭和34年の台風7号により大規模な土石流が発生して甚大な被害を受けた釜無川上流に位置する大武川、尾白川等の流域の地元企業や行政機関、学識経験者、市民などによって構成されるこの会は、地域の子供達や住民に災害の記憶を伝承するための活動や豊かな溪流環境の保全のための活動を15年にわたって行っています。「甲斐駒清流ウォーク」は、美しい溪流を散策しながら、昭和34年土石流災害の状況とそれからの復興の歴史を学ぶ機会として毎年一回開催。また、被災地大武川の堰堤付近の災害復興記念公園で行われる「砂防校外授業」では、地元の小学校の生徒や父兄を招いて、降雨体験車などによる災害の疑似体験や被災経験者からの状況聴取、模型による土石流実験、溪流にすむ魚など生態系の学習、イワナの放流など、体験的防災・環境教育を実施。さらに、「イワナ産卵河川の整備」、「耕作放棄地の再利用」、「溪流まつり」、「新しい川づくりを考える検討委員会」等、多彩な活動を展開しています。水の脅威と恵みの両面の理解の上に、地域の水防災と水環境保全に対する長年の地道な取り組みを高く評価し、今後の発展・継続を期待します。

○審査部会特別賞:奈良県 学校法人奈良学園 奈良学園中学校・高等学校

「芦川的环境保全と生物多様性保全活動の取組」

当校は、大和川の支川・芦川の源流付近に約12.8haもの広大な敷地を持ち、その2/3は地域の里山であった<学校林>、校地に流入する3本の<沢>、そして砂防堰堤によってできた<池>と、陸上・陸水生態系の環境要素が揃っています。この敷地を「地域の財産」と位置づけ、環境保全と生物多様性保全活動のフィールドとして一般に開放し、地域のNPOなどの協力で「環境教育発信拠点校」をめざして様々な活動を展開。これまでに雑木林、棚田、小川、湿地、ため池などの再生に取り組み、県レッドデータブックの絶滅寸前種や絶滅危惧種9種の生息が確認されるなど、多くの生物の回帰と増殖が確認されています。また、中学生を対象とした「環境研修」、高校生を対象とした「環境実習」、卒業生による「里山支援チーム」が地域の子供たちを対象とした「里山の森を育てるクラブ」など、常に若い担い手が循環する人的支援システムを創っているのが特長です。敷地の立地環境を活かした環境保全と環境教育への実践的取り組みを高く評価し、今後の更なる発展を期待します。

本年も、地域に根ざしたユニークな活動、志と熱意に満ちた活動、地道に継続し成果を挙げている活動、など、全国各地から多彩・多様な水に係わる取り組みからの応募がありました。本年は特に、海外での国際貢献への取り組みが例年より多く、そして、本年も東日本大震災と係わりを持つ応募がかなり寄せられ、そのうちのいくつかが受賞されました。また、高校の各地域に根差したユニークで優れた取り組みが目立ち、2つの大臣賞、3つの未来開拓賞、1つの審査部会特別賞を獲得したのも特筆されます。次代の担い手が次代を創ろうとする取り組みに接し、大変心強く感じます。

応募された皆様に心から感謝申し上げますとともに、受賞された方々に心からお慶び申し上げます。

皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、安全で美しく活力のある地域の形成へ向けて、皆様の活動がますます発展し深化することを祈念して、講評の締めと致します。

審査講評 2014 日本ストックホルム青少年水大賞 審査部会長 千賀裕太郎

賞の概要と応募状況:

「日本ストックホルム青少年水大賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校の生徒または生徒の団体による水環境に関する調査研究活動および調査研究にもとづいた実践的活動を表彰するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテスト「ストックホルム青少年水大賞 (SJWP)」に日本代表として参加することになります。

昨年の日本代表である山陽女子高等学校地歴部は、「瀬戸内海の海底ゴミ問題の解決に向けての取り組み」と題して29ヶ国からの代表に混じって大健闘いたしましたが、惜しくも受賞を逃しました。

本年は昨年よりも応募がかなり増えて、全国28校から32件 (北海道1件、東北3件、関東8件、中部2件、近畿8件、中国7件、四国1件、九州2件) の応募がありました。いずれも身近な水環境を対象にした力作ぞろいの高校生らしい自主研究でした。

審査経緯

審査は、5人の審査委員からなる審査部会において、ストックホルム青少年水大賞世界大会の審査基準に従って、厳正に行われました。この審査基準は、妥当性 (水環境がかかえる重要な問題に的確に取り組んでいるか)、創造性 (問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性が見られるか)、方法論 (明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか)、テーマに関する知識 (既往研究のレビュー、参考文献、情報源、用語の理解等が十分か) の4項目からなります。

審査は2段階で行われました。まず審査委員がそれぞれ行った書面審査の結果を持ちよって審議し、上位3チームを選びました。次にこの3チームから、英語による要旨発表及びパワーポイントを用いたプレゼンテーションを聴取したうえで質疑を行い、審査委員による慎重な協議を経て「日本ストックホルム青少年水大賞」、「優秀賞」並びに「審査部会特別賞」の授賞団体をそれぞれ選定しました。

審査結果と授賞理由

「2014年日本ストックホルム青少年水大賞」に輝いたのは、「水噴流による水浄化の研究」と題する調査研究を行った広島県立広島国泰寺高等学校理数ゼミ物理班 (代表: 武井建叡、桐田勇利、杉本貴一、指導教諭: 棟田陽) です。

テッポウウオが口から水を吹いて空中の昆虫を捕らえる方法にヒントを得て、水面下から加圧によって水面上に発射される「水噴流」が、周囲の水面付近の水を巻き込むことから、この現象を用いて水面に広がる油等の汚染物質を効率的に除去できると考え、水噴流の水輸送現象に関する基礎的実験を行いつつ理論的な解明を試み、その成果をもとに、水噴流を用いた場合の水面上の油、藻類、プラスチック片等ゴミの回収の可能性を示唆しました。本研究は、現時点では基礎的研究の段階ではありますが、水域浄化法の研究としてユニークであり、湖沼や海湾等の水域における汚染物質の新たな除去手法の開発に寄与することが強く期待されるので、日本ストックホルム青少年水大賞を授与することと致しました。

「優秀賞」に輝いたのは、「守れ! ふるさとのカスミサンショウウオ~保護活動と遺伝的多様性の解析~」と題する調査研究を行った、岐阜県立岐阜高等学校自然科学部生物班 (代表: 高橋晃太郎、加藤真帆、後藤暁彦、指導教諭: 高木雅紀、矢追雄一) です。

西日本に生息する絶滅危惧種カスミサンショウウオの保護に向け、個体識別と行動パターンを解明し、その生息を可能とする湿地再生などの生息地整備を積極的に行って個体数の増大に寄与していること、さらに遺伝的多様性確保の観点から、個体群の遺伝的系統関係を解析し、カスミサンショウウオは氷河期に東海地方に分布を拡大したことを初めて示唆しました。こうした保全活動と科学的調査とのバランスの取れた研究活動を高く評価して、優秀賞を授与することと致しました。

「審査部会特別賞」に輝いたのは、「可視光による持続的な硝酸イオン除去法の開発」と題する調査研究を行った、学校法人静岡理工科大学静岡北高等学校科学部水質班 (代表: 浅田崇之、石切山真由、武田晴樹、指導教諭: 高木裕司) です。

富栄養化が著しい学校近くの洪水調整池 (麻機池) の水質汚濁の原因が、無機態窒素 (硝酸イオン) であることを長期にわたる流域河川水質調査で明らかにし、この解決のため、硝酸イオンを選択的に除去できる吸着材の開発を目的に詳細な基礎実験を行って成果をあげており、今後の実用化に向けた研究の進展が強く期待されるので、審査部会特別賞を授与することと致しました。